

橋口 亘

Ⅳ 上月行敬『琉球人行粧』に描かれた提灯と弁当

1. はじめに

宇和島藩士・上月行敬の『琉球人行粧』(鹿児島大学附属図書館蔵)には、嘉永3年(1850)の11月に江戸城へ登城した帰りとみられる琉球使節の行列の末尾で、人々が提灯や惣弁当を運搬する様子が描かれている[丹羽2017]【図1・2・4・5】。

本稿では、上月行敬によって描かれた、この『琉球人行粧』の行列末尾の提灯・惣弁当について、他史料を交えながら考察を行ってみたい。

2. 『琉球人行粧』に描かれた提灯

『琉球人行粧』の行列末尾で運搬されている提灯群は、「薩州様御側挑灯」との書入れがある屋根付きで島津家の丸に十文字紋をしるした火袋が丸い提灯と、「同高挑灯」(薩州様高提灯)との書入れがある島津家の丸に十文字紋をしるした火袋がやや細長い提灯、尚家の左三つ巴紋をしるした火袋がやや細長い提灯に分けられ、行列末尾で運搬されている提灯群はこの3タイプに分類できる【図2】。

「薩州様御側挑灯」とは、その名の如く、藩主近辺に配備された提灯の意であろう。提灯が不要な明

るい時間は、当該図に描かれるように、他の提灯とともに行列の末尾に集められ、提灯が有用な時間帯に藩主近辺に配備されていたとみられる。

琉球使節の行列に加わった、鎌田正純による日記『鎌田正純日記』嘉永3年11月19日の条をみると、この日の琉球使節の江戸城登城の行列は、「正六ツ時」(午前6時頃)に江戸城へ出発、「暮過御帰殿」とあり、また3日後の同年同月22日の条をみると、この日の琉球使節の江戸城登城の行列は、去る19日と同じく「正六ツ時」に江戸城へ出発、「六ツ半比御帰殿」とある。両日ともに行列が江戸城へ出発した早朝の時間帯や屋敷へ帰着した夕方時間帯は暗く、行列(及びその準備・片付け等)で提灯が使用されることが考えられる。

天保3年(1832)における琉球使節江戸上りの一行に加わった儀衛正の日記[池宮1995]をみると、江戸城登城の当日は、七ツ半時から準備のため「挑灯燈せ」、登城の途中で「芝町辺々夜明候付、挑灯消候也」とあり、登城の準備・出発を行う夜明け前の時間帯に提灯が用いられ、登城途中の芝町付近で夜が明け提灯の火を消したことがわかる。



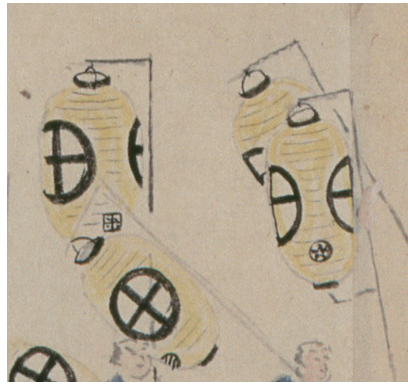
【図1】『琉球人行粧』に描かれた提灯運搬の行列 (鹿児島大学附属図書館蔵)

提灯運搬の行列は、琉球使節の行列全体の中において末尾付近に描かれている。この後ろ(左方向)に行列最末尾となる惣弁当運搬の行列が続く。



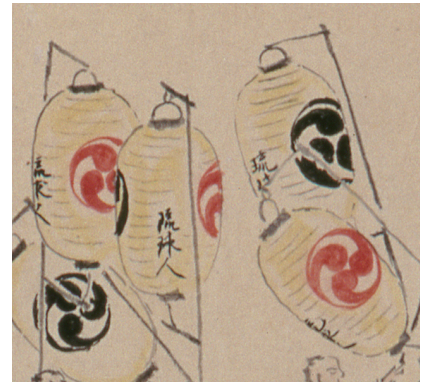
御側提灯（薩摩）

屋根付きで島津家の丸に十文字紋をし
した火袋が丸い提灯：「薩州様御側挑
灯」



高提灯（薩摩）

島津家の丸に十文字紋をしした火袋
がやや細長い提灯：「同 高挑灯」（薩州
様高提灯）



高提灯（琉球）

尚家の左三つ巴紋をしした火袋がや
や細長い提灯

【図2】『琉球人行粧』に描かれた提灯3種 〈鹿児島大学附属図書館蔵〉

「薩州様御側挑灯」は、屋根付きで火袋が丸い提灯として描かれており、屋根付きである点などが、他の提灯に比べて高級さをうかがわせている。

一方、「高挑灯」（高提灯）とは、高張提灯のこととみられ、「御軍賦改正標章図」をみると、「一 大身分以上其外大丸高張等被相用候面々ハ前後脇下に小ク自分紋所」とあり、『琉球人行粧』に描かれた火袋がやや細長い提灯のうち、丸に十文字の御紋所の脇下に小さくしるされている複数種の家紋は、それぞれ島津家の家臣の家紋であることがわかる。提灯が有用の時間帯は、それぞれ家臣のもとにこれらの提灯が配備されたのであろう。

島津家の丸に十文字紋をしした火袋がやや細長い提灯を持つ一団の後方には、尚家の紋である左三つ巴をしした火袋がやや細長い提灯を持つ一団が描かれている。左三つ巴紋は、提灯一つにつき胴部の表裏二箇所にしるされており、うち一箇所の紋は朱色、もう一箇所の紋は黒色で表現されている。

琉球使節の江戸城登城における「登城行列ノ次第并人物形」には「一 高張挑灯ノ紋所赤シ恰好日本ノ如シ」とあり、日本型の高張提灯に赤色の紋がしるされていたことがうかがえ、『琉球人行粧』に描かれているような朱色の左三つ巴紋がついた提灯であったことが推察される。

3. 『琉球人行粧』に描かれた惣弁当

『琉球人行粧』では、琉球人行列の最後尾に、「惣弁當」を「釣台」に載せて運搬する様子が描かれている【図4】。釣台の薦の隙間から覗く物体は赤く表現されており、朱塗りの弁当容器であると考えられる【図5】。近世の行列図で、多量の弁当が運搬される様子が描かれている事例は珍しい。

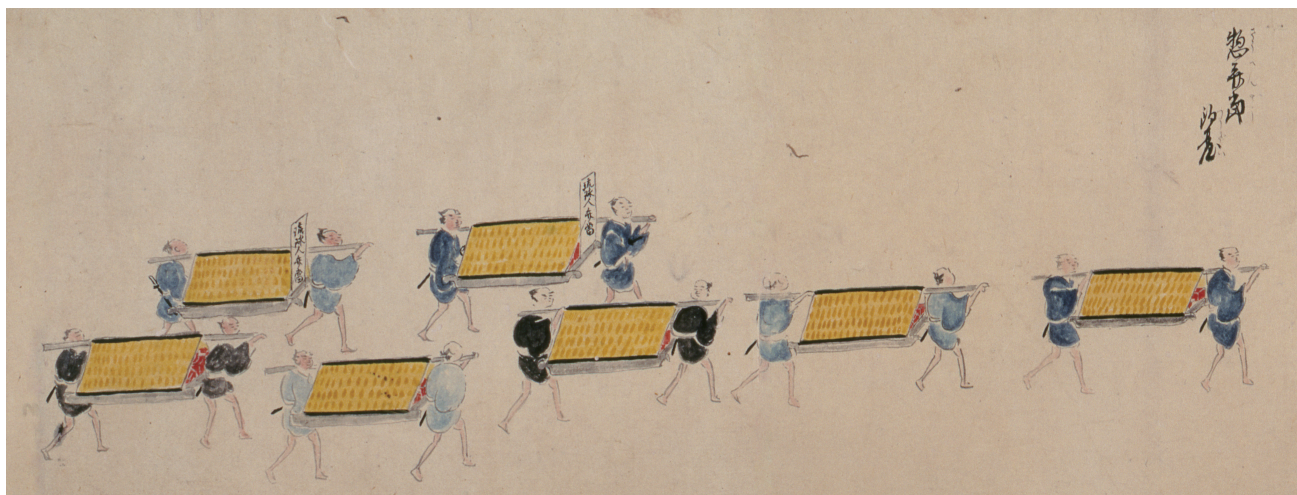
中津川市苗木遠山史料館所蔵の「大名遠山家資料」に含まれている、大名行列における役割や構成人馬数・具足等が書かれた文化3年（1806）の「極秘要用積大概」をみると、その「道具請取覚」のリストには、「一 飯ごふり 百人前」の記載がみ



【図3】嘉永3年『大成武鑑4巻付1巻. [1]』

掲載の薩摩の高張提灯

〈国立国会図書館デジタルコレクションより〉



【図4】『琉球人行粧』に描かれた惣弁当運搬の行列 〈鹿児島大学附属図書館蔵〉

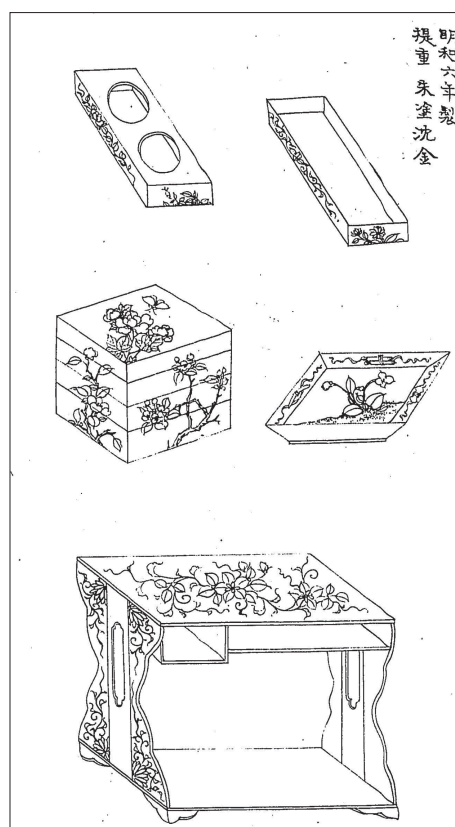


【図5】釣臺の薦の隙間から覗く朱塗りの容器（左）
と釣臺に付けられた「琉球人弁当」の札（右）
〈鹿児島大学附属図書館蔵〉

え、大名行列に大量の弁当容器（飯行李）を用いたことがうかがえる。同「極秘要用積大概」の「一番具足長持へ入置品」のリストには「飯ゴリ 十九モ／小頭手替共用候積」とあり、また同「極秘要用積大概」の「二番弓長持入可持品」のリストには「○飯こり ツマリ次第」と記されており、飯行李を長持に入れて運搬したことや、飯行李 19 個が「小頭手替共用」であったことなどがわかる。

『琉球人行粧』と「極秘要用積大概」の事例を比較すると、『琉球人行粧』では弁当容器を長持ではなく釣台で運搬していること、また、弁当容器が行李ではなく、朱塗り容器であるとみられることなどが相違点として挙げられる。

広く知られるように琉球は漆器が特産品の一つであり、『琉球人行粧』の図中に、「惣弁当」として、漆器であるとみられる外面朱塗りの容器の姿が多数



【図6】琉球漆器の朱塗沈金提重の図

石澤兵吾『琉球漆器考』掲載
〈国立国会図書館デジタルコレクションより〉

みえる理由として、こうした背景が関わっている可能性があるだろう。

『琉球人行粧』に描かれた、弁当運搬用の釣台 7 台の中には、「琉球人弁当」と記された札のある釣台が 2 台みられるが、この札は、琉球人用の弁当と日本人用の弁当を区別する目印と考えられ、両者



【図7】「飯行李」らしき容器で弁当（握り飯等）を食す旅人
歌川廣重『東海道五十三次細見図会 藤沢』（部分）
〈国立国会図書館デジタルコレクションより〉



【図8】飯行李の弁当（握り飯・沢庵）
竹製の飯行李に入った玄米の握り飯と沢庵漬。こうした弁当は「腰弁当」とも呼ばれた。

で弁当の中身が異なっていたことが推察される。

前出した、儀衛正の江戸上りの日記〔池宮 1995〕では、江戸へ向け鹿児島を出発した天保3年9月朔日の条に「今朝、王子御始末々迄本蔵より料理賄有之先例候得共、此節朝昼飯共自分拵二而候也」とあり、この日の昼食では「御持参之提重弁当開き」と記され、琉球側で弁当を作ったことや、提重

を用いた弁当が食されたことなどがわかる。

4. 弁当の内容

『琉球人行粧』に描かれた行列末尾の惣弁当の中身については、江戸城登城後の行列が描かれているとすれば、その中身は空であったと考えられる。また弁当の内容については、具体的に推察できる材料には乏しい。ただ、嘉永3年11月22日に行われた琉球使節の江戸城登城の際には、島津斉興・島津斉彬・玉川王子・従者・松平大隅守家来の面々に「御菓子吸物御酒」が下され、「下官」へは「御玄關前腰掛大手下馬腰掛」にて、「強飯」が下されたとされる。江戸城にて幕府から食事が出されることを事前に知っていれば、弁当を持参するのは考えにくい。したがって、多量の惣弁当が描かれている『琉球人行粧』が、江戸城登城当日の琉球使節の行列の姿を描いたものとすれば、嘉永3年11月22日の江戸城登城帰りではなく、11月19日の江戸城登城の帰りの行列である可能性が高いのではないだろうか。

では、大名らが江戸城へ登城した際に食した弁当はどのような内容だったのだろうか。例えば、武蔵岡部藩主安部家の慶応2年（1866）における献立記録「御献立帳」〔木津 1928、宮腰 1968・1971・



【図9】大名家の登城弁当の一例

〔木津 1928、宮腰 1968・1971・1997のほか、一般社団法人 Plenus 米食文化研究所 WEB サイト内の公開ページ「弁当ライブラリー」(https://kome-academy.com/bento_library/)を参考に再現)



【図 10】大下馬での供待ちの弁当の一例

堀秀成『下馬のおとなひ』を参考に再現。再現では、ひじき・油揚げ・焼豆腐などを盛り合わせたが、実際には、おかず 1 品だけのケースなどが考えられる。

1997] に記される江戸城登城時の弁当は「簡素」[江原 2009a]・「素朴」[江原 2009b] と評されている。参考までに、当該「御献立帳」に登場する、慶応 2 年 12 月 7 日の江戸城登城時の弁当の事例を挙げると、その中身は、かまぼこ・しいたけ・御飯・香の物とされる。確かに、大名家の登城弁当ながら、現代の一般的な弁当店の幕の内弁当よりも品数も少なく、シンプルに感じられる内容である。

このような大名家の登城弁当と比べ、城の大下馬で主人を供待ちするような下々の者たちの登城用弁当はどのような内容だったのであろうか。幕末・明治を生きた国学者（元古河藩士）堀秀成の随筆『下馬のおとなひ』（明治 14 年成立）の「供待」の章では、大下馬で主人を供待ちする人々が描写されており、その弁当については「辨當はしらげあしき飯を、長めの箱につめて、ひじきあぶらあげやきどうふなど、合せものとす。そのかたつかたにいろあせたる澤庵の香の物、あつく切りたる二ツ三ッあるめ⁽⁷⁾り」とあり、このように弁当のおかずは、ひじき・油揚げ・焼豆腐などであったという [岩本 1954]。

一方、琉球においても、首里城へ登城・出仕する琉球士族が弁当を用いる習慣があったようだ [真栄平 1989]。

5. 「琉球人」の文字標示

『琉球人行粧』に描かれた行列末尾の提灯や惣弁

当を眺めた時、もう一つ興味深いのは、長い行列を構成する多くの人馬・諸道具の中で、とりわけ提灯と弁当（立て札）の両方に「琉球人」という文字標示がみられることである。

この標示には、前述したように提灯や弁当を扱う当該行列の構成員が、日本人用と琉球人用を区別するための役割があったと考えられるが、一方、行列（または行列の図）を見る側からすれば、この直接的な文字表現により、これまで琉球使節を目にしたことのない人間でも、漢字の意味さえ知っていれば、提灯や弁当の札を見て、この行列の異国人たちが琉球からやって来たことを明確に理解でき、仮に琉球人であることを事前に知っていたとしても、それをこの文字標記によって再認識でき、予定調和的な安心感や納得感が与えられたと考えられる。『琉球人行粧』で、故郷の人々に「琉球人」の行列の姿を伝えたかった上月 [丹羽 2017] が、当該場面（提灯・弁当運搬場面）を省略せず、丁寧にすくい上げて描写したのも、こうした所以なのであろう。

いずれにしても、この直接的な「琉球人」という文字標示は、薩摩藩が世人に誇示したかった「異国・琉球を支配している」という事実を知らしめるという目的の上で、結果的にプラスに機能したと考えられるものであり、行列末の道具に添えられたワンポイントながら、「さりげなくくどい」小細工、「ダメ押し」的な仕掛けのように、確実に効果を発揮していたのではないだろうか。

6. おわりに

本稿では、『琉球人行粧』に描かれた、行列末尾の提灯・惣弁当について、他史料を交えながら考察を行った。行列図において、提灯や惣弁当の運搬の様子は省略されることが多く、『琉球人行粧』に描かれた、行列末尾の提灯・惣弁当の運搬図は、当時の琉球使節の行列の実態を知る上で、貴重な資料といえ、今後さらなる資料分析が期待されよう。

【注】

(1) 『鹿児島県史料 鎌田正純日記 三』[鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1991 : 363]。

- (2) 前掲注 (1) の p. 364。
(3) 『鹿児島県史料 斉宣・斉興公史料』[鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1985 : 549 号]。
(4) 『琉球関係文書 三』所収。
(5) 中津川市 古文書アーカイブ公開資料
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2120605100/2120605100200010/ht000310>
(6) 「嘉永年録」『通航一覧続輯 卷之四』(琉球國部四止 ○來貢 嘉永三年)(『通航一覧続輯 第一卷』[箭内編 1968] に所収)。宮城栄昌氏は、琉球使節の江戸城登城の際に、「玄関前腰掛、下馬腰掛に待機していた供の者には強飯が供せられた」ことを紹介している[宮城 1982 : 135]。また、久貝典子氏も「下官へも「強飯」がふるまわれた」という指摘を行っている[久貝 2017]。
(7) 堀秀成「下馬のおとなひ」『日本随筆大成』第二期第十一卷[日本随筆大成編輯部編 1929 : 517]。

【引用・主要参考文献】(五十音順)

- 池宮正治 1995 「〈資料紹介〉儀衛正日記」『日本東洋文化論集』(1)、琉球大学法文学部
岩本堅一 1954 「「磯山千鳥」と「下馬のおとなひ」」『國文學研究』9-10、早稲田大學國文學會
江原絢子 2009a 「三 近世の食生活—日本料理の完成と普及／5 日常食と非常の食／簡素な大名の食事」『日本食物史』吉川弘文館
江原絢子 2009b 「四 近代の食生活—西洋文化の受容と折衷化／4 都市と地域の食生活／変化する昼食の形態」『日本食物史』吉川弘文館
木津三辰 1928 『調味料理栞』六
久貝典子 2017 「HW446『琉球人來朝記』をよむ—儀式の場での衣装という視点から」『阪巻・宝玲文庫の世界 事業報告・研究報告会 報告書』琉球大学附属図書館
丹羽謙治 2017 「上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋賑之図』について—鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図書館本のあいだ—」『雅俗』16、雅俗の会
Plenus 米食文化研究所「弁当ライブラリー」(一般社団法人 Plenus 米食文化研究所 WEB サイト内の公開ページ)
https://kome-academy.com/bento_library/
真栄平房敬 1989 『首里城物語』(おきなわ文庫 48)、ひるぎ社
宮城栄昌 1982 『琉球使者の江戸上り』(南島文化叢書 4)、第一書房
宮腰松子 1968 「江戸後期武家の食事について」『神戸女学院大学論集』14 (3)、神戸女学院大学
宮腰松子 1971 「幕末ある大名の御献立帖」『風俗』10-1、日本風俗史学会
宮腰松子 1997 「幕末のさる大名家の「御献立帖」」『全集 日本の食文化』10 (日常の食)、雄山閣出版株式会社

【資料等】

- 「嘉永年録」『通航一覧続輯 卷之四』(琉球國部四止 ○來貢 嘉永三年)(『通航一覧続輯 第一卷』所収)：箭内健次編／清文堂出版株式会社／1968 年
『鹿児島県史料 斉宣・斉興公史料』：鹿児島県歴史資料センター黎明館編／鹿児島県／1985 年
『鹿児島県史料 鎌田正純日記 三』：鹿児島県歴史資料センター黎明館編／鹿児島県／1991 年
「下馬のおとなひ」(堀秀成)『日本随筆大成』第二期第十一卷：日本随筆大成編輯部編／日本随筆大成刊行會／1929 年
「極秘要用積大概」：中津川市苗木遠山史料館所蔵「大名遠山家資料」／文化 3 年 (1806)／※ (中津川市・WEB サイト「中津川市 古文書アーカイブ」公開資料) (ADEAC) (<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2120605100/2120605100200010/ht000310>)
『大成武鑑 4 卷付 1 巻. [1]』：〈出版者〉出雲寺万次郎／嘉永 3 年 (1850)／国立国会図書館所蔵 (国立国会図書館デジタルコレクション)
『調味料理栞』六：木津三辰／1928 年
『東海道五十三次細見図会 藤沢』：歌川廣重／〈出版者〉村鉄／国立国会図書館所蔵 (国立国会図書館デジタルコレクション)
『琉球関係文書 三』：(元国事執掌史料)／島津家本／東京大学史料編纂所所蔵
『琉球漆器考』：石澤兵吾／〈出版者〉吾妻健三郎／1890 年／国立国会図書館所蔵 (国立国会図書館デジタルコレクション)
『琉球人往来筋賑之図』：上月行敬／〔嘉永 4 年 (1851)〕／鹿児島大学附属図書館所蔵
『琉球人行粧』：上月行敬／〔嘉永 4 年 (1851)〕／鹿児島大学附属図書館所蔵

【謝辞】

本稿作成にあたっては、「日本近世生活絵引—琉球人行列と江戸編—」編纂共同研究班メンバーの皆様方をはじめ

め、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、鹿児島大学附属図書館、そのほか多くの方々から御協力・御教示を頂いた。特に研究班の丹羽謙治氏には提灯の調査や文献調査、資料等の入手にあたって、たいへんお世話になった。また、東京都台東区根岸の「五十嵐提灯店」の五十嵐肇氏には、提灯の種類や部位名称等について多くの御教示を頂いた。記して感謝の意を示したい。